

西洋見聞圖解

二編

全

= 1

1510

2



瓜生政和著



西洋見聞圖解

東京書肆

二書房發行

二如
1510
2

西洋見聞圖解二編序
夫寰宇之大億兆之衆由其見
之廣識之精者何也今世西洋
洲中學業專鳴已所觀而發明
也世之一事一物莫不究其理
焉雖然至其精者以圖解最為

二上

近之矣不為無裨益于初學豈
視之哉爰吾友及其請叙欣然
顯之

明治六年癸酉二月

夷隱靜巖梅村清題書



掬水在手



月

子東隱士梅村清
印

- 上の巻目録
- 天文茶 晝夜の説
- 經度緯度の説
- 各国溝河の説
- 日ラミイデ万里長城の説
- 并蒙古の英雄起るの説
- 古今二大征戦の説
- 下の巻目録
- 近世の二大戦の説

- 婦人粧ひの説
- 西洋人茶 并加琲と嗜む説
- 支那人鴉片と嗜む説
- 各国砂糖の説
- 烟草の説
- 塩の説
- 食糧の説
- 亞細亞の諸國の勝れりと云ふ説
- 通計十四條

二七〇

二

凡例

自国より西へと言ひ九島の事ゆへ外必と存して西必と云は
支那印度の事ゆへ方今ゆへ至りて歐羅巴諸島と存して
西必と云ふ然るも此書西洋見聞図解と題号をたこれと
歐羅巴島の事ゆへとあるに亞細亞の事ゆへ亞非理加亞米
理加澳地利亞の事ゆへ書載れが中実と外必と背くは
似て道にえより世果は九島物 皇国と東の果とるに西進とて諸島
性るは西洋の必をらんと言書肆が理屈を任せりの故看官
暫時笑ふと許しね

西洋見聞圖解二編卷之上

東京

瓜生政和編集



○天文并小昼夜の説

天文の学は泰西の星学老嘉利阿と又人嘉靖
二十年のころを遠鏡の長さ三丈ゆへ上下に方へ旋
轉し根お仕掛する物と造りゆへ日月五星の体像と
え極めより西洋各国の天文者との法の基附

考へ今日の精一さふ至れり既小前編小由言るがごとく
 地球へ丸一然して東より左旋り小自ら水車の根小
 週りあぐる日輪の周圍を行乃日輪へ向ひる國の
 其光りと遠く照る一是すまをち昼なり日輪小昔
 さころ必へ其光りと久ふ故暗一是すまをち夜と
 地球自ら一ト旋りして昼夜の差別とあり日輪の周
 圍と一トまをちするを以て一年の區切とるす地球一
 時のる小六百里と輪轉れど人その旋動を覺えず

して大空と作ご日や月の西へ
 付板小思いらぬ取小はめて
 東へ往バ岸の物も西高ひ
 て走るか如く小見物と同一
 理なり



の市小担て小鞠と求め
 夜小入り家小帰り是と

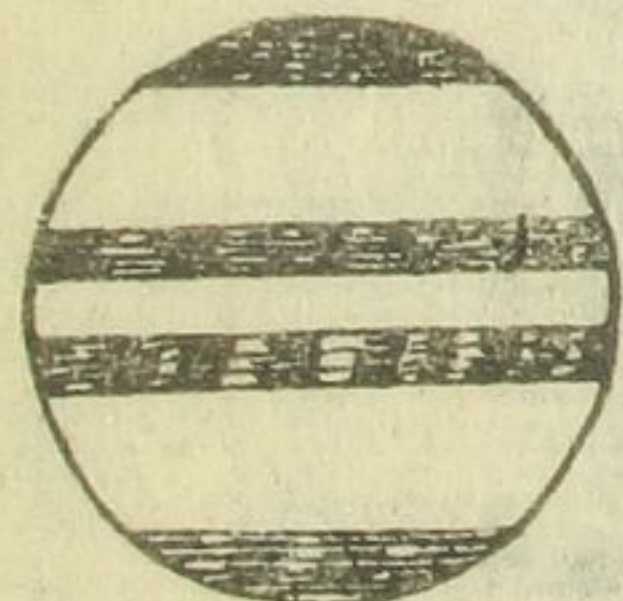
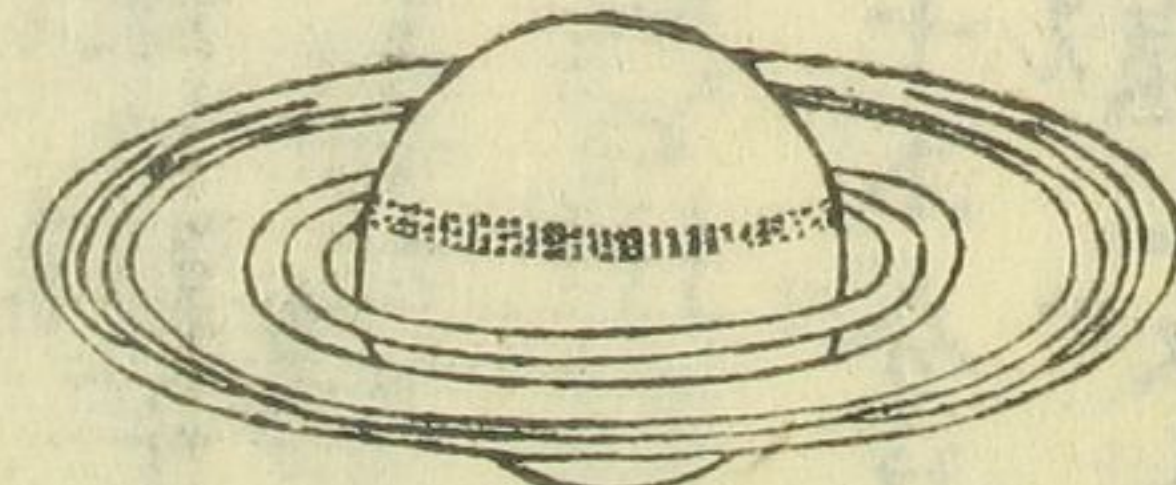
えんとて 燈火へ向ふ 燈火は向ひたる方へ明くして 鞠の
片面よく見ゆるとも 燈火は背をうける方の半面は暗くして
糸の減り見えぬ故に 故にうらりと回して 暗き方の減り
の糸をえんと 燈火の向きを前の明くたる方へ 燈火は背
き暗くぬらう 其紀星とて 児女を示して云ふ 地球
日に向へば 益となり 日へ背けを夜とぬる 曜星は
ありと子供あはれを 譬へありぬ
蒼天不衆くの星羅列見え 或はひの動を 或はひの終れて

如何なる星学家も 其教と多うと 能はず 然るに 西洋
の星の学者 大千星鏡と以て 見極め 日輪の周囲
と行道する星八つあり 地球もまゝ 其中の二つの星あり
は八星の巡り 往々を 別くみて 取分け 日輪の周囲
○水星とあり 次と ○金星次と ○地球次と ○火星次と ○木
星次と ○土星次と ○天王星次と ○耳明星と 次才小
日輪と遠ざかり 往々あり 日輪を以て 樞紐の 紀星とあり
は十二の星とんくみ ぬらりて 其周囲の 圓繞りて 行道

まるなり十二の星の中ふて
 木星一むん大きく而して皆
 不同るると下の図の如し
 或る天文博士大千里鏡と
 以て日輪と見えし日
 面の東の端に黒を點あり
 此點日と西へ移りて十三日
 めみ至り後み見えずなり

天王星	海王星	火星	地球	金星	水星
○	○	○	○	○	○
同八十二倍	地球より大いなること 百六十倍	同百分の千倍	直径三千二百四十七里	同百分の九十六	地球より小なること 百分の一

一が又十三日と経て東の端に
 現へれ西へ巡ると前の如し
 故に日輪の体へ丸くして二
 十六日めみ一週りすことを
 發明せしとぞまことに日輪の
 中の黒を點の大きさを
 測りてみよ小なる物なり
 て直径百六十里余大なり

木星	土星
	
同四百 十尺倍	同七百三 十五倍

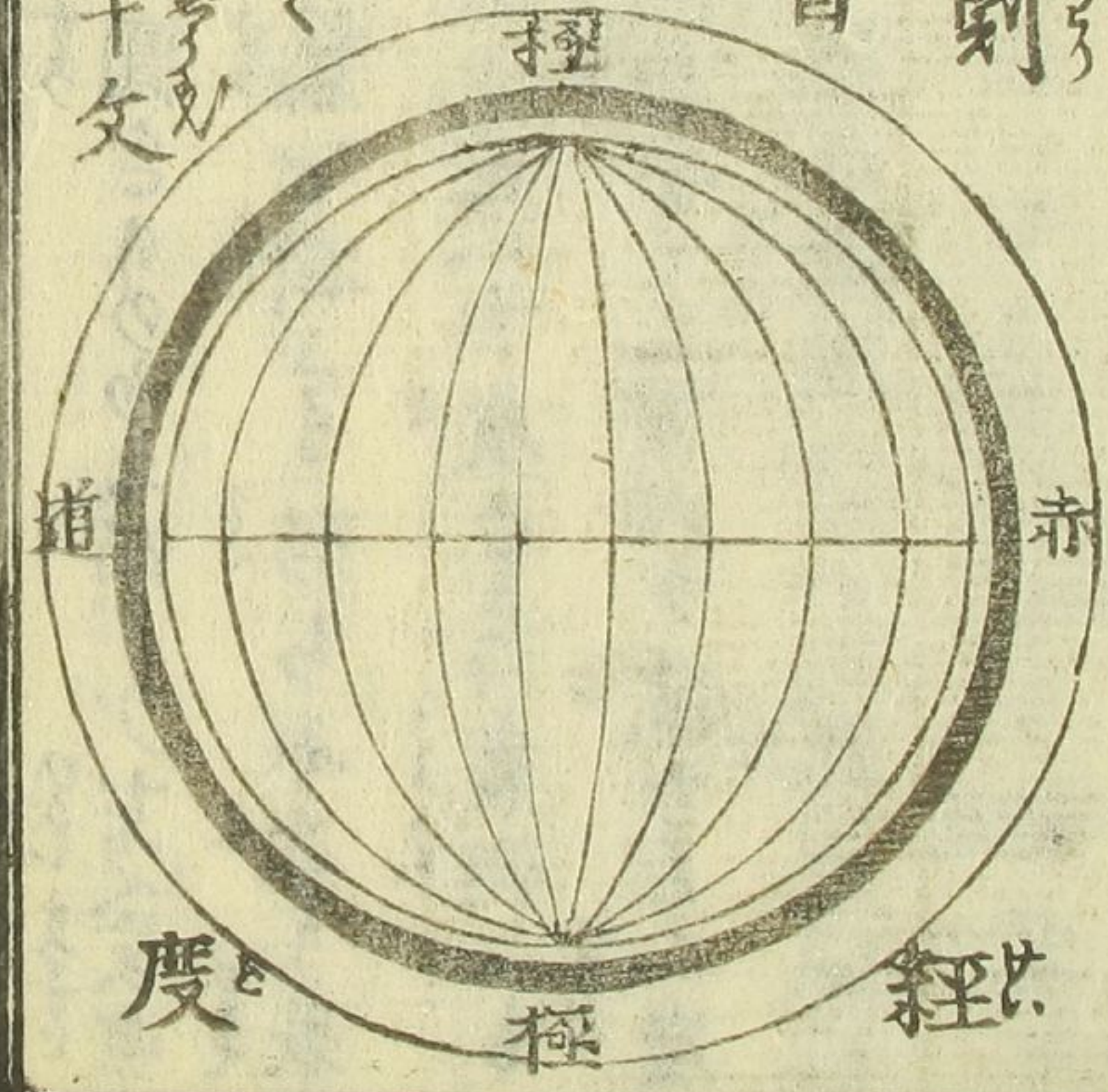
かる物ふく二百里余あり」となり

○經度緯度の説

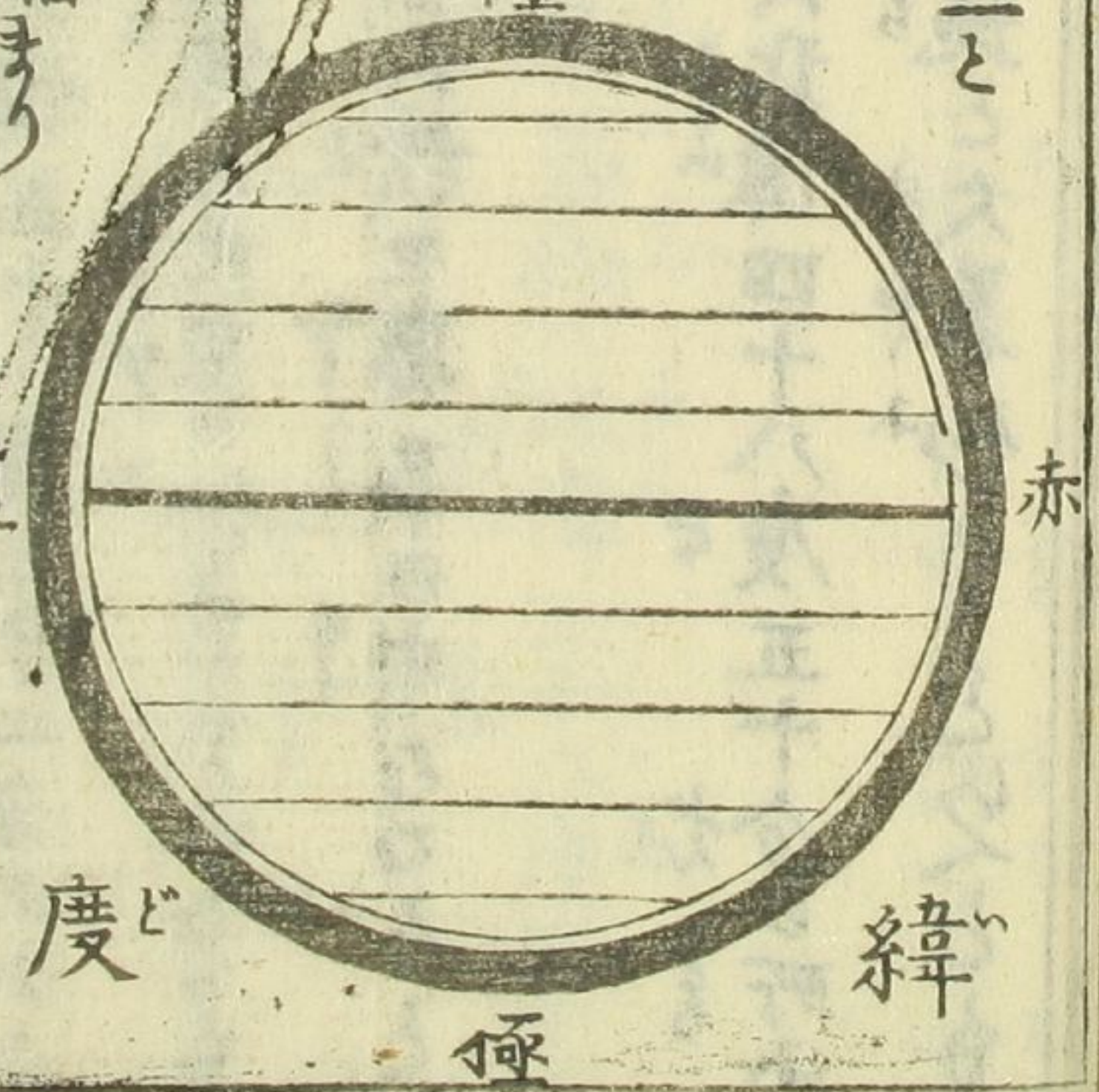
地球の北の端と北極と南の端と南極と呼ぶ南極と北極との中東西より東へ連ふ線を引くと赤道とよみ赤道を中とる南極北極までの間は九十度に分け西東へ赤道の通り筋を引くと赤道より南極へ九十北極へ九十合せて百八十に分ける是れ南北の緯度と号けまると平行線と云ふ所あり

説一地球の形ちの圓さりのゆゑ西より東へ連ふ筋を引ると圓さ世界へ輪と掛する形ちの筋より表側へ北極より南極まで百八十度の間に裏側も同じく百八十度あり両面合せて三百六十度なり一度は二十八里。三あり故に世界の周囲は二十八里。三を三百六十合せて一萬。九十里余なり經度を其初めとするところ定りたる故に各の分の首都ありひ航海の曆と製する司天臺等より初

東西南北 數へて百八十ふ割るなり日本東京と云ふ北
 極より南極まで六ふ節と引さふの筋より西と
 東へは二ふ八里〇三ふ刺
 付て往べ地球の周圍三百
 六十ふ分ることを東
 西の經度といひまゝ子午
 線と稱するなり右の如く
 世界の周圍と東西南北十文



字ふ分け一度と二十八里〇三と
 定むれども徑な西極ふ
 至り皆集るをてところ
 の赤の所ふての極
 二十八里〇三と乃れと極
 極へ近奇るるど限ふ縮まり
 八十五度のところの
 其一度僅るふ二里半ふる
 ぎざりなり



二上
 六

日本東京の如き北緯三十五度三十五分の所あり

英吉利の首都倫敦あり北緯五十一度三十二分の所あり

ありて概表加良あり右の奥地と大畧似ありたりとも

海山の摸根宜ありきやきさあり我々奥羽の中ありたりと

同あり

佛蘭西の首都巴黎期あり北緯四十八度五十分の所あり

在りて概表加良あり右の地と大畧似ありたりとも

冬まじく雪さ少く氷さのあり厚く雪の降るあり稀

なりとも

亞米理加合衆国の首都華盛頓あり北緯三十八度五十四

分の所ありありて日本東京ありよりありあり

同地新紐約の港あり北緯四十度四十二分の所ありありて

華盛頓よりありあり

支那の首都北京あり北緯三十九度五十四分の所あり

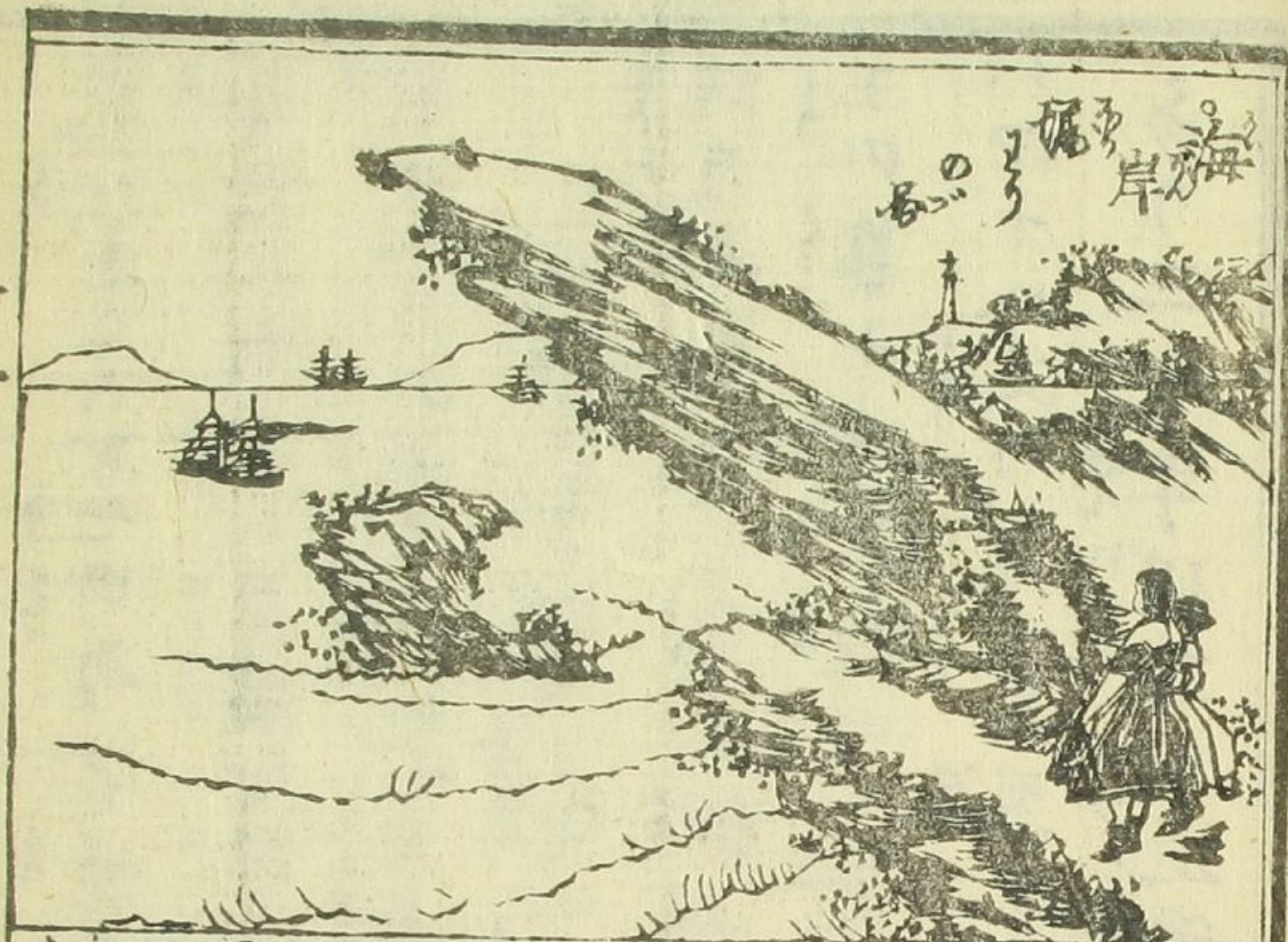
ありて日本南部益忌の辺ありあり

○ 各国溝河の説

西洋各国とも小蒸気車を以て運送を便するもの多
あす河と堀りて船と通ずるの較向もまた仔細なり
英吉利一ふて堀割る河の長さ一ツ小徑を合する
と一千里四百里不及
暹米理加合衆国小堀割一河の長さ一ツ小徑を
合するは二千五百里余小至るよりこの堀割の入用金
高九千六百万兩かり一里の堀割小三万八千四百兩

と費やしつりとせ

和蘭の首都アムステルダムの町日本大坂の府下の如
く堀割の溝河八方小通ト橋と架するところ大小三百
ヶ所不及り千八百三十五年今より五年三年前の
府下より北の海岸まで二十五里の長さ幅二十万
深さ尺五小堀割大砲七十尺門と橋一軍艦とも自
由小通ずる橋小ありけ入用二百二十五万兩
りしと



四年今より十八年前佛
 蒙西人の目通ふて紅海と
 地中海の間の橋士の地峽
 と掘割り長サ四十九里半
 幅四十二里深さ二尺の
 河と依り地中海と紅海へ
 通ト西洋より東洋への
 便み儲ふ蒸気船ふて走

支那の運河天津の地より始りて黄河と揚子江
 とを横小貫き流一三百六十里を経て杭嘉府小
 止る是と世傳第一の掘割と為す今より千二百
 六十四年前隋の世小この大土功と起一曰く三万人
 の力を勞一数十年を経て成就る事す捨盡
 して元の代忽必烈帝小至り北の方の残れると
 ろは掘割金貨物とるせりぐ倍諸物の運送と便
 み且出水と防ぐの用最大ありと云千八百五十

わんげいとうろと七時めて通りさることを得べし一城割の
普積十年余の星霜を経て千八百七十年今より三年
前の二月ふ至り始めて大盛ませりあり

○「ヒラコイデ」を万里の長城蒙古の英雄起るの説
埃及必ふ「ヒラコイデ」と称するものあり是れ往古の国
王の墓にして其数六十余あり及び取分け大いなるもの
はに十八丈の高さふ至りしよ石を以て積上げしもの
あり三千年以前の造築のよし云れど今も残存し

人の壯觀とあり支那の長城を對して大いなる

物とす
支那の万里の長城は秦の始皇帝韓韜國の敵軍
と防んが乃ふ築きし物ありて東へ遼東の山海関
より始まり黄河に超え西へ渡り北の方嘉峪峯
至りて止る長さ大畧六百里ふ連り亘り城壁の
高さ二丈五尺厚さ一丈五尺外面は多角なる煉
化石を以て疊し内部は土を以て固め上は凸凹形の

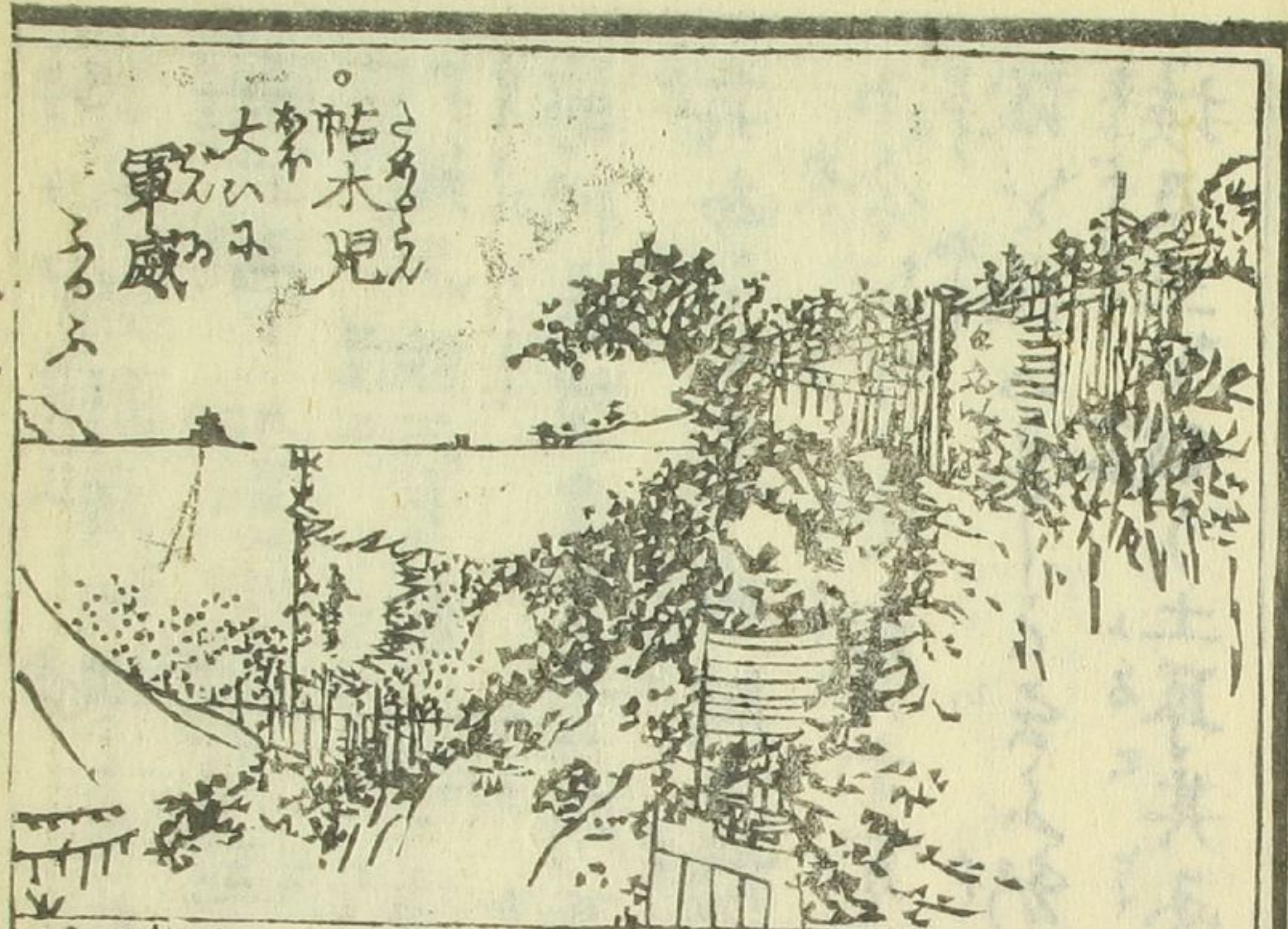


胸壁と堅き五十万毎小弓
 形の穴のたを通し関門を
 設けて成りの兵を候ふけ
 城高き野に立五十丈の
 山の頂に登りまとい下つて
 深谷に落るると実小世界
 牙一の大業ゆいて要害に双
 とふべきみれども千六百十八

年今より二百五十四年前小蒙古王の長城を破り
 支那全国を伐ち平げて終小清朝の大祖皇帝とる
 りいと云へば千仞万尺の金城も恃む小足らざるの成
 蒙古の地へ往昔より宛けざるの種蛮ありといふとも蓋世の
 英雄かまろぐ起り隣方の各必と討從ぐ世界と一統あると
 んとろろの勢ひ小至ると既小三度小及びり千五百年
 前蒙古の大將「アツテラ」といふ者魯西亜の内地より羅馬の

兵と侵し西に進んで日耳曼列国を陥りて白耳兵必と
 係吞して仏蒙西に攻入りて羅馬の兵隊仏蒙西の軍
 勢と力と合せ仏蒙西の「シヤロン」の地不會戦あり蒙古
 の兵破れて討死する者三十万に及びて伊太利の
 地まを退きしるが路ありて大将「アツチラ」病死あり
 其軍終に瓦解し及べり
 まる今より七百十七年不蒙古の「アラン」エルダツク
 の地不鐵木真といふ人生れ幼稚より大志ありしけ

患難辛苦を経て後所の戦争に討ち入り長城を破り
 て支那に攻入り成りて金と伐ちて元の大祖と成り
 たりて入亞細亞部の七八分を討伐し魯西亞日耳曼波
 蘭國とて併吞し齡すて七十に及びて全世を統一統
 せんと思ふの念倍益んるを以て宋と對んとて軍旅中
 六盤山に致せり生前戦争ふて人を殺すと夥しく其數
 五百万余に及びり又妾五百人除と持たねば子も多く産
 せりとあんな大祖の五世忽必烈といふ者に至り宋と亡り



帖木兒
大いふ
軍威
ふるふ

次身小隣国へ攻入りしんごく一
 皆降参して其部下小属すく
 一けきバ兵力ますます盛大せいだい
 ふふり終ふ世衆と一統いつとう
 て其君と合んと志し
 首都を沙曠良の地小定さうりやう
 むるの後比耳西亞必支那ひじりや
 鞞鞞と攻取り魯西亞のろしや

二三

一三

て支那全土と平定へいぜい一号と元の世祖といふ我朝北条時宗しげむね
 執權の時軍艦と渡りて筑紫小攻寄せ神風の乃小兵士しげむね
 十方海底の藻屑と散り一は忽必烈が軍をうけりしげむね
 まご元の世祖忽必烈の後裔小帖木兒といふ者あり今しげむね
 より五百三十六年前土耳其斯坦まご獨立鞞鞞しげむね
 小地のコケシユと云ふ所小生る帖木兒幼維くしてしげむね
 とるり伯父の許小養へれ生長小至り驍勇ありしげむね
 びなく小内の礼を小受て兵と擧ぐ是と一統しげむね

二三

一三

都墨斯科府を侵しその領り踏ふれあふくの都
城と陥し入るるに後四年を経てまゝ印度の
内地に攻入り都城を屠り恣に奪ひ掠むるに
前代未だあり音府聶離城を圍む生擒の敵
兵ありて戦鬪の妨げありとて城攻の二日前
小令を下して虜十万人と多く殺し其て都
城を陥し是れと云ふ初て小亞細亞と伐乎らげ
埃及王と破り土耳其必ふ攻入り土耳其必の軍

勢三万帖木兒の兵卒二十万アングラの地小會戦
僅六時の月の戦争小土耳其の軍と多く討破り土
耳其王と虜ふるに其を殺し於て小亞細亞の地を
其領分とするに帖木兒支那と併吞せんことを圖り
大い小兵装を調へ翌年二十余万の大軍と將い韃靼
必より発向せしが路小病疾小罹りて死せりは時
支那小てハ明の朝ふて永樂元年ふ當れりことぞ

古今二大征戦の説

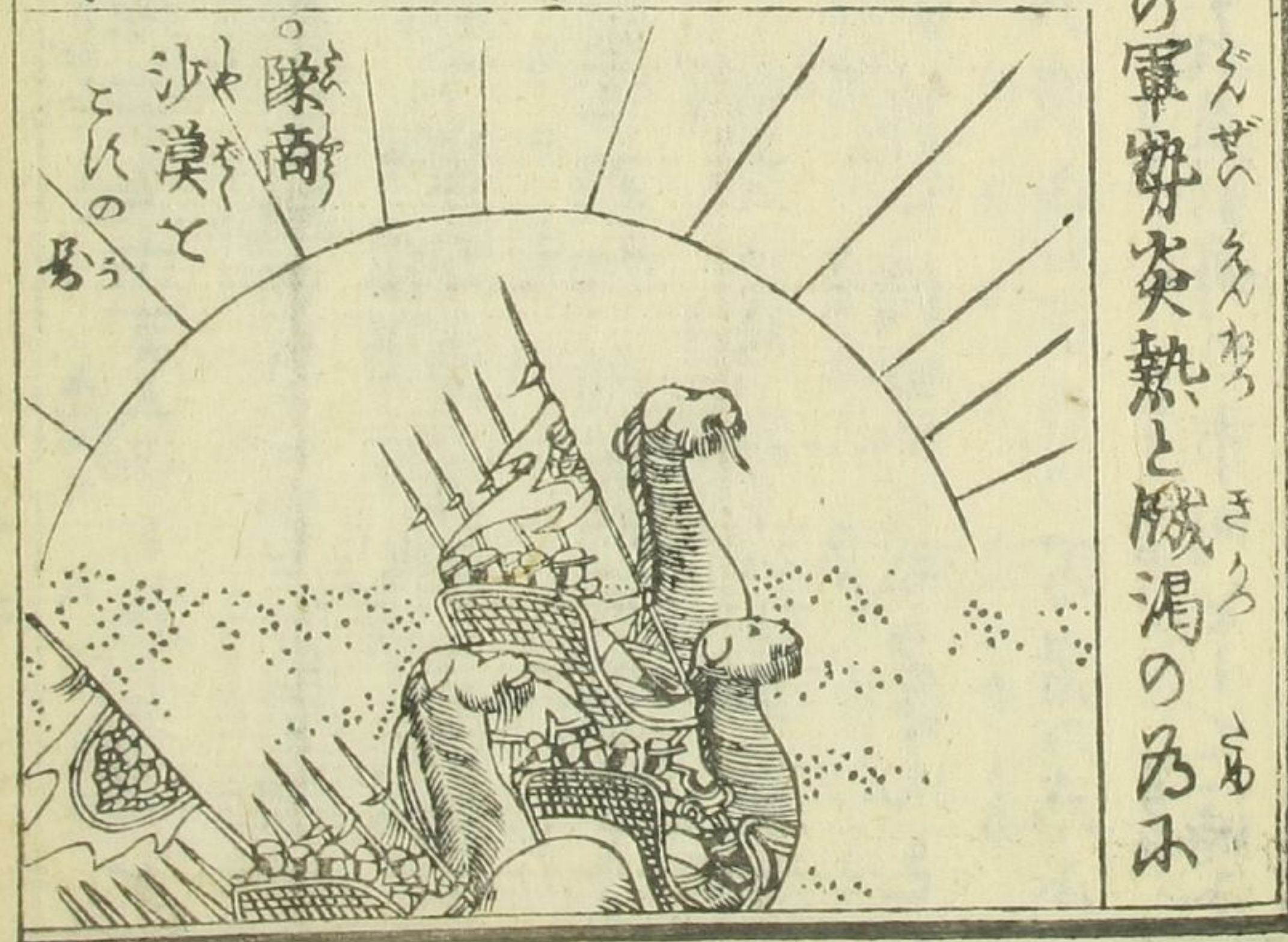
紀元前三百三十二年小當て歷山王すて小希臘必と
一統して希臘帝と稱し波斯必と降服せしめ又
進んで地中海辺の諸方小亞細亞の地の数城を略し
埃及必と攻取り勢ひ不棄し於大軍と將ひて東の
方へ侵入り印度の全必と攻取んと企て再度希臘
必と發して軍隊漸く進み既小亞刺伯の大沙漠小
徑かきり

沙漠の地へ脚花よりて道の標的とみるのこそが

故ふる所と往りのは路絶ふあり隊とあり磁
針ふ針り星斗と指て方角と定むるに船の大
中と往り同し故小路絶と異名して陸船とも
言ひ路絶より水の水の在るところを知り且後の中
小大いある水袋ありて数日を経るも咽喉と渴
すところ故小沙漠と超するは路絶ふあり
れい出来難し沙漠の中とてども稀あり山ふ
草の生るるところもある大いの中ふ島のある

と同一性素の人のけきと強純の陶料とあり
 の如くある人の飲水食料とあり
 とありねむ性かう沙漠の地雨降るとをねむ
 水更ふくく百里三百里健て始めて此の湧泉ふ
 出あふと千八百十七年今より六十九年前ふ
 阿非利加及の商人二十人強純千八百之と引
 沙漠と強るふ水の存るとを人健達せず炎
 熱と渴のふはそく死せとふ

千八百十二年今より
 六十年前ふ
 死するの数万ふ於て
 附従と將士らとの遠征の
 苦しとふ性えず帝と怨と
 訟と述ると多けきと壁出
 除家なく兵と返すふ及び



破崙の魯西亞ろーあ攻入せめいるや惣勢五十万人山を拔ぬき海を
 例すの勢いほひ有あれ魯西亞人ろせんも敵たごすべからざるを知ら深く
 内地うちに逃のがれんとす魯西亞人ろせんも敵たごすべからざるを知ら深く
 入り終おひ魯西亞の舊都墨斯科府まげまでぞ進すすむ
 時九月の末すえありて天あまをく雪ゆきまゝ降ふりけり魯西亞人
 宿陣しゆくじんして春の暖あたたかまるる時節ときせつと待策まちさきと廻まわらんと
 めりて魯西亞針あひらんと其夜魯西亞のる者ものの乃すなは
 府下ふかの家いへを火ひと放はなされ莫な形かたち科しやうの市町いちまちとして一時小

灰あし煙えんふりんと魯西亞人ろせん攻入せめいるや惣勢五十万人山を拔ぬき海を
 養やしやふの食糧しきりやうとを乞こふと凌あぐの家居いけとを失しひ如何いかかと
 も詮術せんじゆつをく舊路きゆうろふりて總軍勢そうぐんせいと引返ひきかへせし魯西亞人
 亦またくもく飛雪ひせつ路ろを埋うめて空漠くうばくたる廣野ひろの白銀しろぎんの
 海うみの如ごとくも魯西亞人ろせん攻入せめいるや惣勢五十万人山を拔ぬき海を
 魯西亞の軍勢ろせんぐんせいも魯西亞領ろせんりやうを離はなすべからざるを知ら深く
 緩めざれば敵たごふ討うちを賊寒せきかんふ斃ころれり得え猛威まうゐと振ふる
 ひる魯西亞の軍勢ろせんぐんせいも魯西亞領ろせんりやうを離はなすべからざるを知ら深く



一八九の死に一拿破崙
 其兄の「オボリ王と辛くもて
 佛蘭西の首都巴黎斯へ
 帰ることになり翌年春そ
 んと一暖氣借すところ積りし
 雪の消ければ墨斯科府より
 四百千里を隔てる「ナイメンの
 地」に抵るまで二十万餘の死

戸は如不露をれ彼如不いへ連綿する有さるるは
 人毎不天息一慘然とらずと云ふとなり是西洋ふて古
 今の二大征戦と称する所の方り歴山帝へ遠く南方
 砂漠の地不軍一と炎熱と渴の爲不兵士と殺し志
 と果すと能はず拿破崙帝へ深く北方氷雪の街不陣
 て寒冷と威の故不軍卒を斃し大敗と取り不至る非凡
 英邁の西帝一の炎熱一の寒く冷不遇ちてありまこと
 振はず歴山帝へ凱旋後酒小ありて死し拿破崙

帝ハ歸府の后るハ歐羅巴の各公の兵と戦ふとい
ども克と能はず終不英軍の乃不虜とするハ亞非利
加海の一孤島不流され内居六年ありては島不才と
終りとあん

西洋見聞圖解二編卷之上 終

西洋見聞圖解二編卷之下

東京

瓜生政和編集

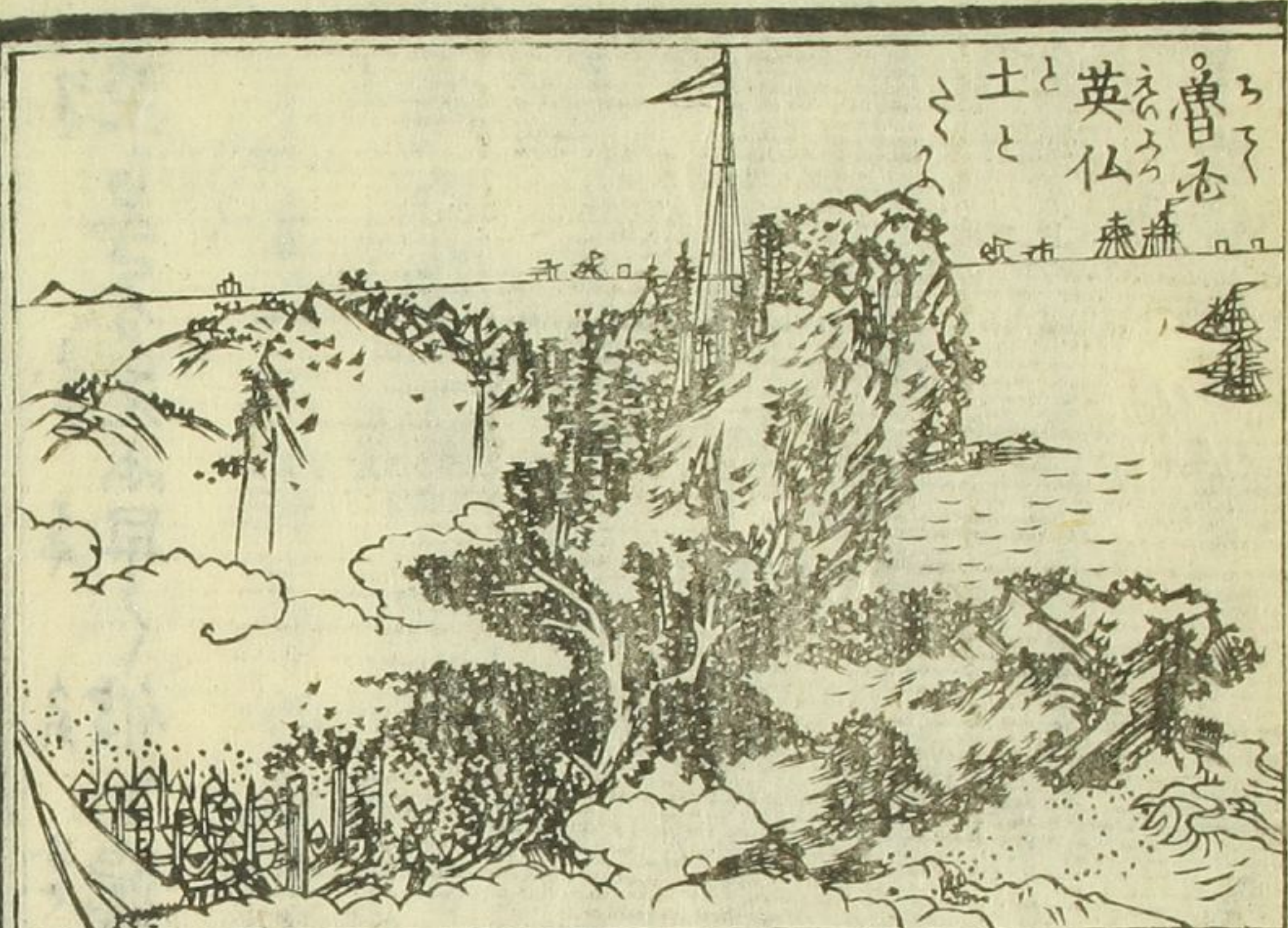
○近世の二大戦

千八百五十年今より二十年系魯西亞必一セバステ
ホール府の大激戦ハ始り魯西亞帝土耳其必の人の
希臘教の宗旨と信ずりめを我が支死と一回と
教の宗旨と信ずる者と討亡とさんと企て土耳其必の



北の境ひより侵入りて其首府君士但丁府の城と
攻んと欲す是は不図て英吉利仏蒙西境地利の三必
より扱ひを入れらるる三必の使節と魯西亞土耳其
友必の使節と合せて五ヶ必の使節境地利必の首
都維也納府に集會し和睦の事とりて後すれ
ども魯西亞の使節敢て往引る事なきを以て戦争
小及ぶりとみ成りてより愛小放て英吉利仏蒙西と
小大軍と起し土耳其必の應援とるし魯西亞勢

至らざる先小早く彼を襲えんと軍艦数十艘を發
し一帯にバルチックの海より魯西亞の首府彼得堡
府の城に逼らんとし一帯に黒海より魯西亞勢の出
来ると遮り伐んとすけは軍の爲ふところ山河數百
里と懸隔り魯西亞勢へ版と脊小強敵と受るとり
ども奮戦抗撃して少くも疲まず英吉利仏蒙西
土耳其の兵に黒海に接し魯西亞領るるクリ
一の地のマバステポール城を取り囲み昼夜を分とず攻



魯西
 英仏
 土と

討ども魯西亞人強めて
 屈せず稍一年の戦ひありて
 竟小呂と落陥魯西亞勢
 敗北小至りしに英吉利佛
 蘭西土耳其の兵士ら執以小
 乗トて退討一英仏土の軍
 大の小勝利を得る小至れり
 是と号けて「セバステポールの

大戦と云ふは戦争ふて魯西亞人の討死四十万余
 仏蘭西人六万余英吉利人四万余土耳其人其数と
 知らず予八百五十六年今より十六年前魯西亞必
 して和睦を請ひ仏蘭西の首都巴黎期小於て事柄
 ひ魯西亞必は以末黒海の濱りへ兵卒と依へ並ざるを
 りつて償とるしりは戦争英仏の軍艦と並「バラ
 カラバアの港より「セバステポールまで十里の及程多るが
 故小英將仏將と計り急小蒸氣車の路と他り軍

艦より陣營へ兵糧火薬とて運送するの往來
と便ふせしとかり思ふ小セバステポール城へ始めより容
易小落階がごときと知りてある俗統ふえふ賊は
捕へて縄と捻より殺逐遠る策小似これどまの
鉄瓦を造りてか故小あの大捷と得たりとふ
千八百六十年今より十二年前亞米理加合衆のふと
南北二小立とて大戦争とふり一事の元は地往
昔より南の方のふと亞非利加島の黒坊と習ひたり

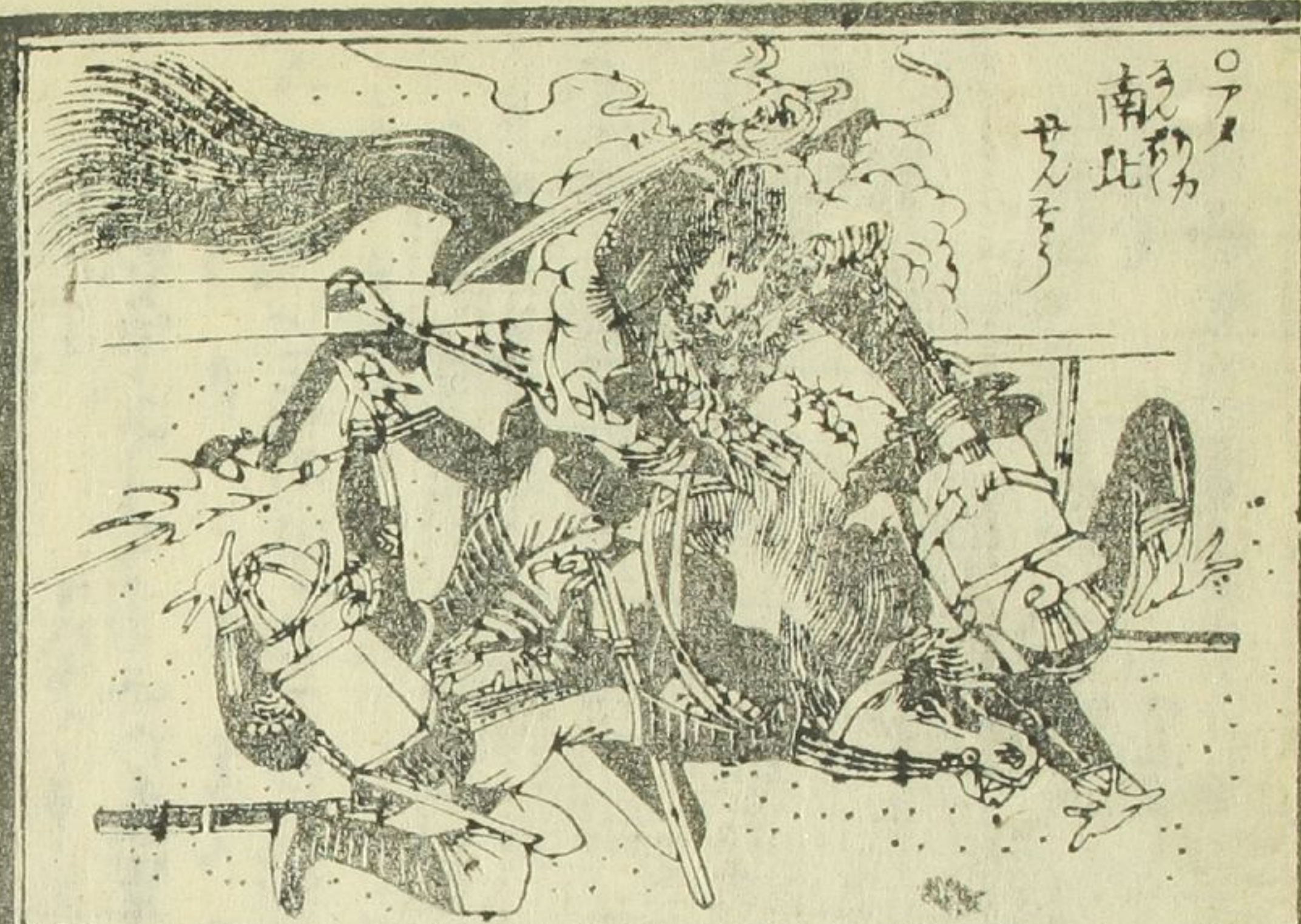
農業の働き男小使ひ来りて北の方のふと是と議論
する如何小黒坊もねばとて牛馬の如く小使ひ一使
人のふと得せぬがざる根小する天理小度なりとて
後小令と下しては事と廢せんとなる小南の方ふと
是と惹引せず愛小放て双方の不和と生れ北の
政府小背に南小よするもの十一カカリチエモントの
地小首府と建てイ井スといふ者と奉て大統領と
合衆小の列と離れ別小政府とを争んとぞ企てけり

北方の大統領リンコンと名者は是と云き南方の土品
と征伐をせんとい合衆諸公へ檄文をどんふ兵士
あひく集り奉り百万除りの大軍とあり南の
方へ討入りしふ南の方十一段の軍勢も五十万人の
者例あり殊小英吉利仏蘭西の軍軍竊ふ是ふ
カと添まを威勢まを度大めて兵と接ありと
ふ南の方の勝利多く「テイ」井スの勢既ふや方の皆
都華盛頓近くと押寄より是や近代才也

の大戦争ありて南の軍と合せ百五十万人互ふ軍
の秘術と極め甲換の軍艦或は地雷火水雷火と
工夫大砲小銃の珍器と造りいで近年の別の戦争ふ
南北の軍勢骨と曝し血と流し討死を負ふの数を
らず就中千八百六十三年今より九年その二月北の
大将「ゼ」子「ラ」ア「ン」グランドと南の大將「ゼ」子「ラ」ア「ル」リ「イ」ト「井」
ル「デ」ル「ニ」スと名地ふ戦ひ二日の別の天闘争ふ故味方の
討死合せて一万二千ふ及びけ合戦初年のそのとら

二下

五



南方勝利と見えたりしが
 第二年めより北方の諸軍
 まことと争ひ弟に率めの
 三月に至りては南方の勢ひ
 巴小衰へ諸大将退く小降伏
 其統領あるコテイ井スも
 生捕とるのければやがて
 勝利して亞非理加品の黒

坊と奴隷小使の事止る前小死せし四ヶ年の戦争
 とは合衆必南の戦争と以て西洋人ら近世の二
 大戦とする之魯西亞の隣必土耳其の回と教宗と
 亡滅し我希臘宗と立んとするの我意の軍と起せ
 るよりして故北より合衆必の北方の必の奴隷と
 廢し政府の政事として仁あらあらんと思ふより兵を
 拳て勝利を得たり魯西亞の回と教宗を廢せんとする
 へ天理小背さ合衆必北方の如隸と廢せんとする

天理小快へり天理小快よりの物天理小快の背くもの
故するといふ是の謂う

○婦人粧ひの立派

北亞米理加加の中墨西哥の首都墨西哥の町の銀の
多きところ故奢者後りの人膝の周圍の多道具の勿
論馬車の輪ふらまも銀の実ふて拵へるといふ佛
蒙西英吉利の都の女の髪のかひ具も銀の物を
身として皆黄金のとて用もま二千二百七十年今よ

り二百二年前閣龍西班牙の女王「イサヘルラ」小説て西の
方ふまめると示しえ極めまると請ふ女王「イサヘルラ」を
善とすれどもは時西班牙の政府戦争あり後ふて美
とて「イサヘルラ」の常用とて細ふること能はず
具と腰へ付る帯物とと賣て大船三艘と要用品と
と買ひ入れ閣龍小渡「亞米理加加」と初めて見出させ
といふを以て「イサヘルラ」が衫の飾りと腰の帯との大造

るるを押してゐるべし然れども婦人の粧ひ具の立派を
亜米理加歐羅巴のものと非ず要細亞弱もまこと然り
比耳西亜の女王の婦人の釧環は右左ともふ大いなる金
剛石と鏤め一つの釧環と光海といひ一つの釧環と月冠と
号く其價四百八十四万兩なりといふ是を以て彼を
ねば一イサヘルラの粧ひもまこと驚くふ品らざる
西洋ふての男女ともふ身の嗜と宜しく上等の人一日ふ
儒伴と三度づゑ久下等の人とひととも一日ふ一を必

らざるかへると常とす垢小染るると作ふて飛ね
病ひとせすと云ふ那の如くあるは湯ふも一日ふ一
づら這入るなり然れども湯に至つて乾くして日向水の
如く西洋人の説ふ熱き湯へ死の外毒なり其征如ふ
草や木も熱き湯と灌げば枯衣の染るも熱き湯と灌れ
ば早くも切の地も弱るなり人若くてもは暎の如く熱き
湯ふせと送入れ自づと身体の中小障とせとろ出来ると
ふ又西洋の女は沐浴するは海绵と能濡し柔らふて

類と洗ふと我が朝の婦人の襟袋と用由る如く僕去
 年熱海の温泉場ふて亜米理加の婦人の湯治する者
 小逢ひ一ふは海綿とをふ者あると以て其功能を問ひけれ
 ば海綿へ類の色と白く一旦一さ艶と出すと云ひ
 たり実不然るや否や

○西洋人茶花加非と嗜む説
 英吉利の首都倫敦西の首都巴黎斯と
 して夜茶と煎し親類明友の親しき者と集めると

の飲め昔の古事今日の
 新波何ふまれ心の筒ふと
 ろと相互ひ小話して後夜の
 楽しとす是と呼で夜茶
 會といふ如くあるを西
 洋人の専ら茶と嗜む支那
 より英吉利船ふて輸出す
 茶の高年と一億一千三四万



夜の茶

九
介ふ下らず其價と平均して五千五百六十万兩小
つくとす

まゝ珈琲とも茶と同根小嗜む珈琲ハ亞刺伯巴西の
如き熱必生する草の実めて豆の如きりのかりを
熬て搗き擣きと煎汁小砂糖と和せ用ひ苦味
と以て胃中を空せ食物の消化と能るるとも西洋
諸方ふて飲料とする珈琲の高年六万石ふ下らず
英吉利の首都倫敦の中をろり小珈琲と商する店八百

○加非
の草



軒あり以て其盛んるとも

まゝ支那小六鴉片煙草

と嗜む英吉利人の毎年その

地へ輸入高六百餘函ありて

その中其價大約四千八百に十萬あり下らず鴉片ハ印度小産

すものありて其煙を喫するなり其煙咽喉小

入るとも其精神恍惚とて酔るが如く眠るが如く味ひ

ちるべうらざるふ至る然れど是と嗜む時へ健別なる者も
え抜とるり且衣食と缺ても呑んとと思ふ故鴉片の
為ふ貧困と極むるの徒多し西洋人の茶と喫
珈琲と飲で精神と清涼め眠れと覚して後侯談
話相互ひの益と求め支那人鴉片と嗜みて益も損
眠り小附い何ぞ西洋人へ他ふ其智と求るものありて
支那人自ら其智と暗ますあり然りと以ども支
那の人豈古へより如くカクえや聖人既小字ふ

臥し寅ふ起るの教えと設け魏の曹孟徳司馬温公
るど皆丸き枕とありて眠りと省き一刻半刻のるは
惜めり然ると鴉片の乃小強て眠と貪る清朝の帝
韃靼より来れ韃靼の凡俗次第小移るもの宛代の
遠巡惟る歎息をさざらん

砂糖の説

亞米理加合衆国の南よりの地方へ楓の大木多く
有りてその楓の脂汁より砂糖と製衣し出すと云ひ魯

西亜の必ふてハ猶の木の横肢へ窪き穴と明けその窪
之木の汁の溜りしと汲とり煎りて砂糖小為すと
有りと云ふ又尚節歐羅巴中央の必ふてハ菜菜
の根より砂糖と絞ると發明す是と作る事と專
一ハ為せりし事ぞ

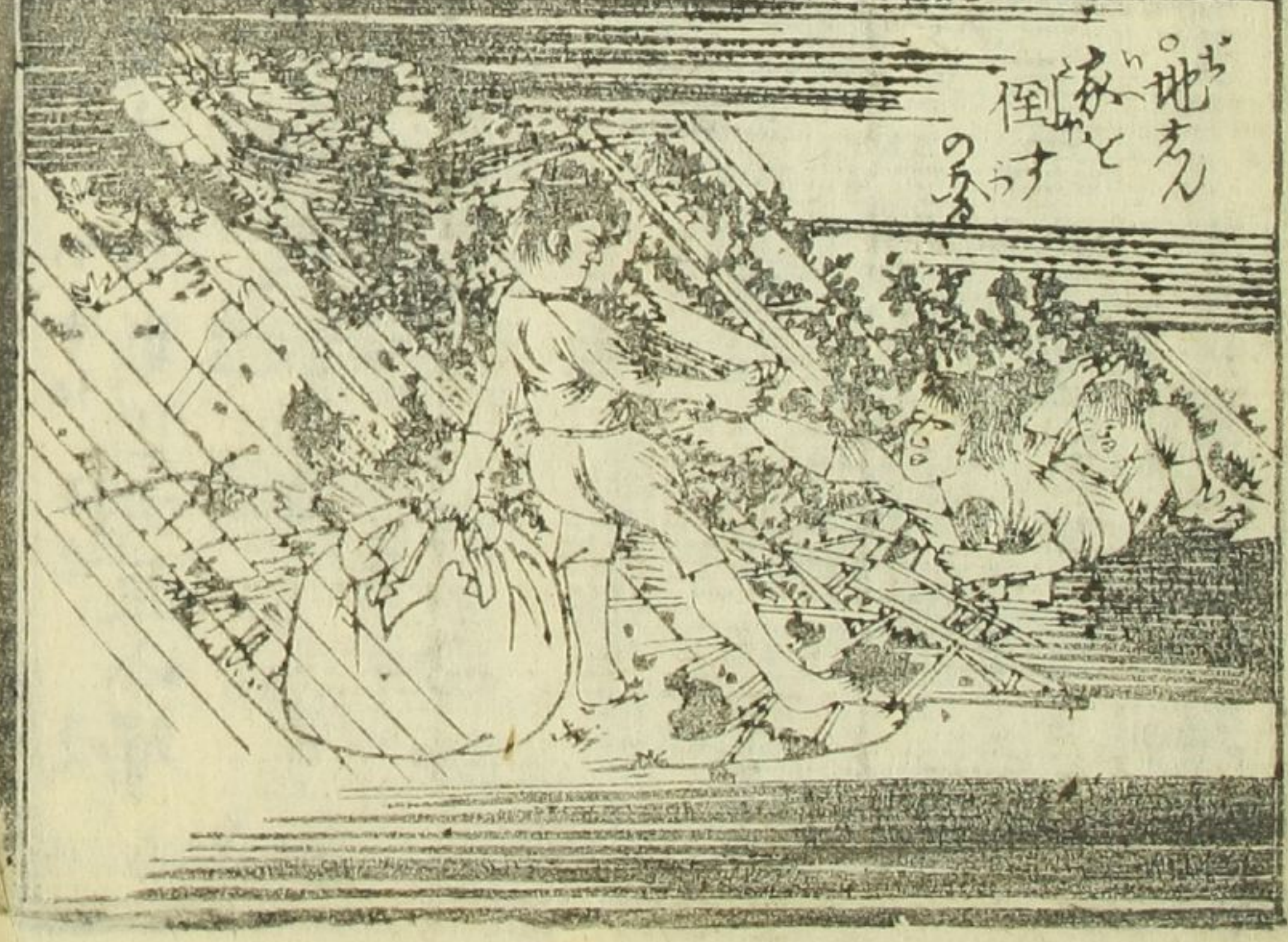
始め英吉利人の砂糖と以て海外の諸必と交易せり
ハ北亞米理加品牙賣加必小産するの最多一ハ地
と今より千に百九十二年
前伊
斯
巴
泥
亞
必
の
密
龍
と

人始りて亞米理加品と見出伊
斯
巴
泥
亞
必
歸
り
女王一ハサヘルラ事と奏一再度船を發して其地
地と見出せり故小キ功と以て西班牙の女王閣龍の
子とて牙賣加の地の總督とらむ然れども大人
彼が命令必服従せず數回一揆と起せり然る必今より
二百年前英吉利人大い必兵と發して西班牙人と退ひ
退け終必手地と奪ひ採りし手後英吉利王の一
族罪ありて必必流罪とせりし人其のく種え

二下

三

去地とちますますそんた繁昌はんしやう小至せうし了
 今よりいまより百五十年前ひゃくごじゅうねんぜん大地震おほい地震
 ありてありて天地てんち震ふる初はじめてすとと駭おそ
 ごとくごとく遂ついに小全島せうぜんじまの形かたち体たい
 とと衰おとろトト人民じんみん号ごうがが死し亡ぼう
 する者するもの一いっ万まん三さん千せん人にんふふ乃なほ及およぶぶと
 小形せうがたの如ごとくごと多おほ量りやう土つち中ちゆう小
 多おほくく石炭せきたんのの量りやうとと含あむむが



故ゆ小砂糖せうさとう小製せうせいするの草くさ夥おほくく産うすす英吉利人いぎりやにんままと
 天竺てんぢくの齋さい狼ろう島じまより桂けいの木のき数かず百ひゃく株くわと後あと一いっ植うてて桂
 林りんとと他ほかりりくく此こゝ必かならず商しょう時じ合あ衆しゆう必かならずの同盟どうめい小せう入いりりくくととぞ
 今日本いまにっぽん小せう化けるる地ちの甘蔗かんざの木のき印いん度どより出でる物もの
 ありてありて唐たうのの支し那な始はじめめて人ひとととそそつつてて千せん法ぽうとと傳でんせせ
 めめそそ支し那な小せう移うつりりてて然しかれれどどもも千せん頃ころをを経へりりてて絞しぼりり汁じゆ
 ののとと用もちひひくくれれ酒さけとと号ごうけけるるよようう後のち大おほ曆れき年ねんる
 小せう玉たまりり蜀しやくのの必かならずのの遂ついに寧ねいとと小せう地ち小せう鄰りん和わ尚しやうとと云いふ

者のめありて始めてはじめて冰糖とうとうを造つくる法りゆうと發明はつめいせしより
蔗くろさとう錫しやく霜そうの制衣せいゐありて突つけしよりとぞ

是これと制衣せいゐすより始はりて甘蔗かんざうの汁じゆと炙あり煎せんりて
蔗くろさとう錫しやくとあり蔗くろさとう錫しやくと曝はくして糖とう霜そうと為なすあり

日ひ本ほんの借か昔せきの外ぐわい必ひつより持もち渡たる砂糖さとうのをかるを意い
甘蔗かんざうと移うつし種しゆをもども思おもふ根こん小せう草そう後ごららりし

百ひやく年ねん以来いらい大だいい小せう培ばい植ちつの法りゆうとほて方かた今いまふて却かへて
外ぐわい必ひつより持もち渡たるのと身みを價ありままと安やすし白しろ

砂糖さとう氷ひやう砂糖さとうハ太たい寬かん必ひつふて出で来きるのと上じやうと交かう趾し
必ひつ是これ小せう次じぐ黒くろ砂糖さとうハ交かう趾し必ひつと以もつて上じやうと太たい寬かん暹せん
羅らこれ小せう次じぎ東とう埔ぽ塞さいふて出で来きると下げ品ひんとあり
と云いふ

○煙草えんそうの說せつ

亞米哩あみり加か加か獨どく眠めん悟ご必ひつ中ちゆう世せ小せう西せい班ぱん牙がといひ地ちの
中ちゆう小せう「タバコ」と呼よぶところあり今いまより三百五十年さんびやくごじゅうねんま
亞あ班ぱん牙が必ひつの人ひとふて「ロマン」ハ子こと云いふ者ものは地ち小せう於おて始は

めて異草と得たり因りて之をタバコと号はとぞ

煙草の日本へ渡りて天正年中のとりて葡萄牙の

高船船りて煙草を持渡りて因りて是と長崎の

東云山の極りてと煙草を世俗小毒あるす

以て言れど然し非ぞ煙草の功に於て存す

一酒と飲で醒んとする時と喫まれば又碎と

出す蓋し煙草の火氣脈の中と薫り蒸りて

徹るも脈中不残る酒の氣を誘ひ出さる

るり二酒小酔て後是と喫すとを氣と寛く

疼と下まを以て酒力早く解り醒るなり三小脈の

空するとも之と吸ば充然とて乳益ん小成る由急

脈の中自然飽が如きと覺る四小脈の張る

と死之と吞ば其れ後中と覺る由急飲食快然

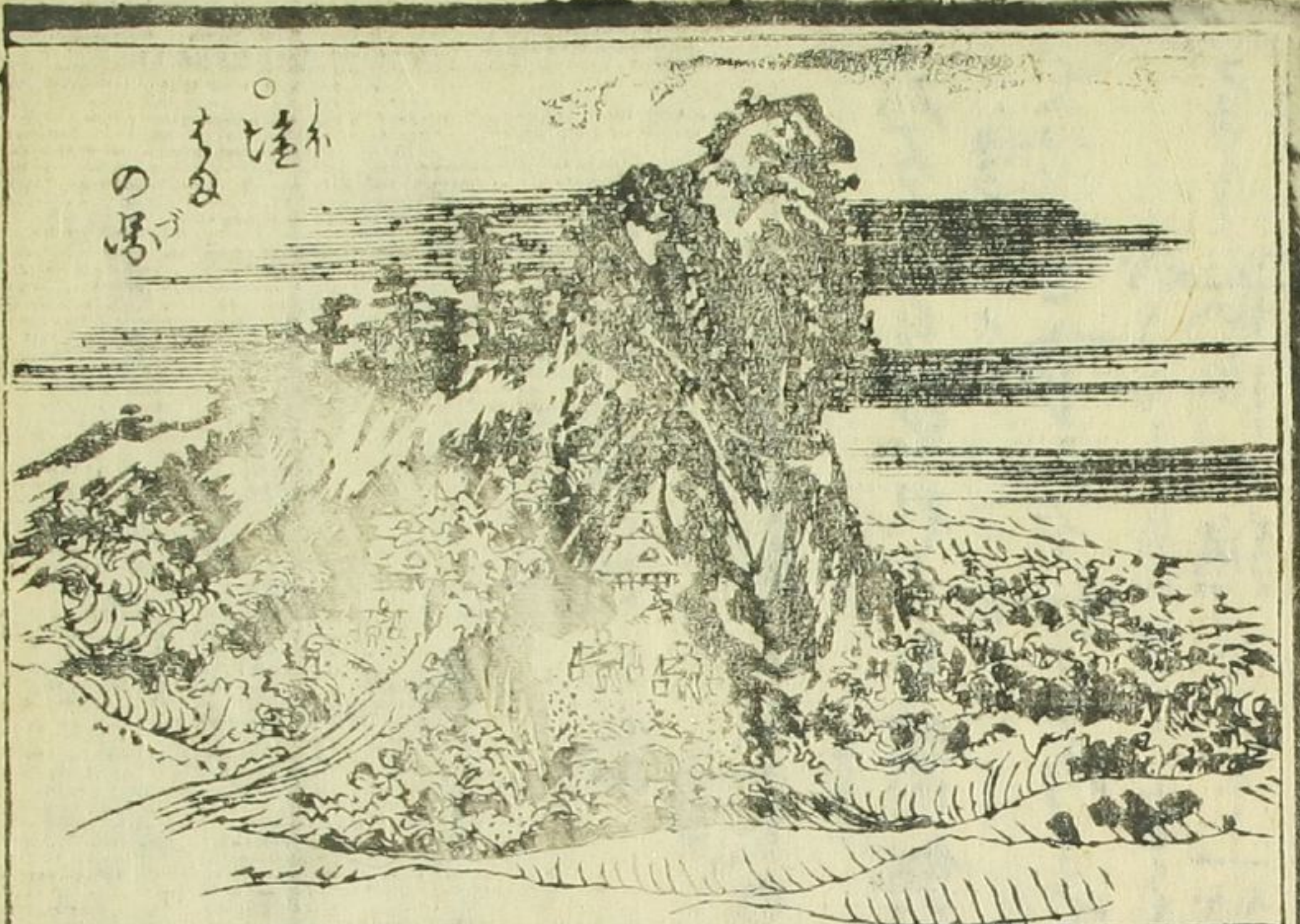
とて消化し易いと云

タバコは万國通称の名あり蕃椒もまた同時代

葡萄牙人の持渡りしものことぞ

○ 塩の説

西^{イベリヤ}班牙^の玉^の海岸^に小潮退^{ひて}後^に水^が乾^き日^が照^らされ^て蒸^す
 勝^る砂^{の中}小^{自然}一種^の白^き塩^と結^成を^食ふ^所
 其^の味^は極^{めて}佳^しま^る弘^蒙西^玉の南^{より}の地方^の
 大^いなる原^中小^湖ありけ^し所^も自^然白^き塩^の
 積^り凝^ると^生じ^て亞^非利^加加^呂ふ^て大^な沙^漠と^て三^百
 里^もに^百里^もあり^し沙^の原^中より^凝造^りし^る塩^とを^産
 一^百兩^西亞^玉ふ^て山^と堀^り阜^と刻^りて^塩と^を産^す



塩の馬

○ 塩とど

日本^奥奥^の会^津と^米津^の
 の^乃の^山阻^み六^十里^越と^号
 する^所あり^し傍^に塩^とを^出
 す^井大^小二^つと^穿て^りし^る

二下
つらふに尺と隔つ毛初ち支那にて井塩と称する
りのみり井塩池塩と出すの土日本の中ふも同ありて
弥ら一からぬ物ありとぞ

○食糧の説

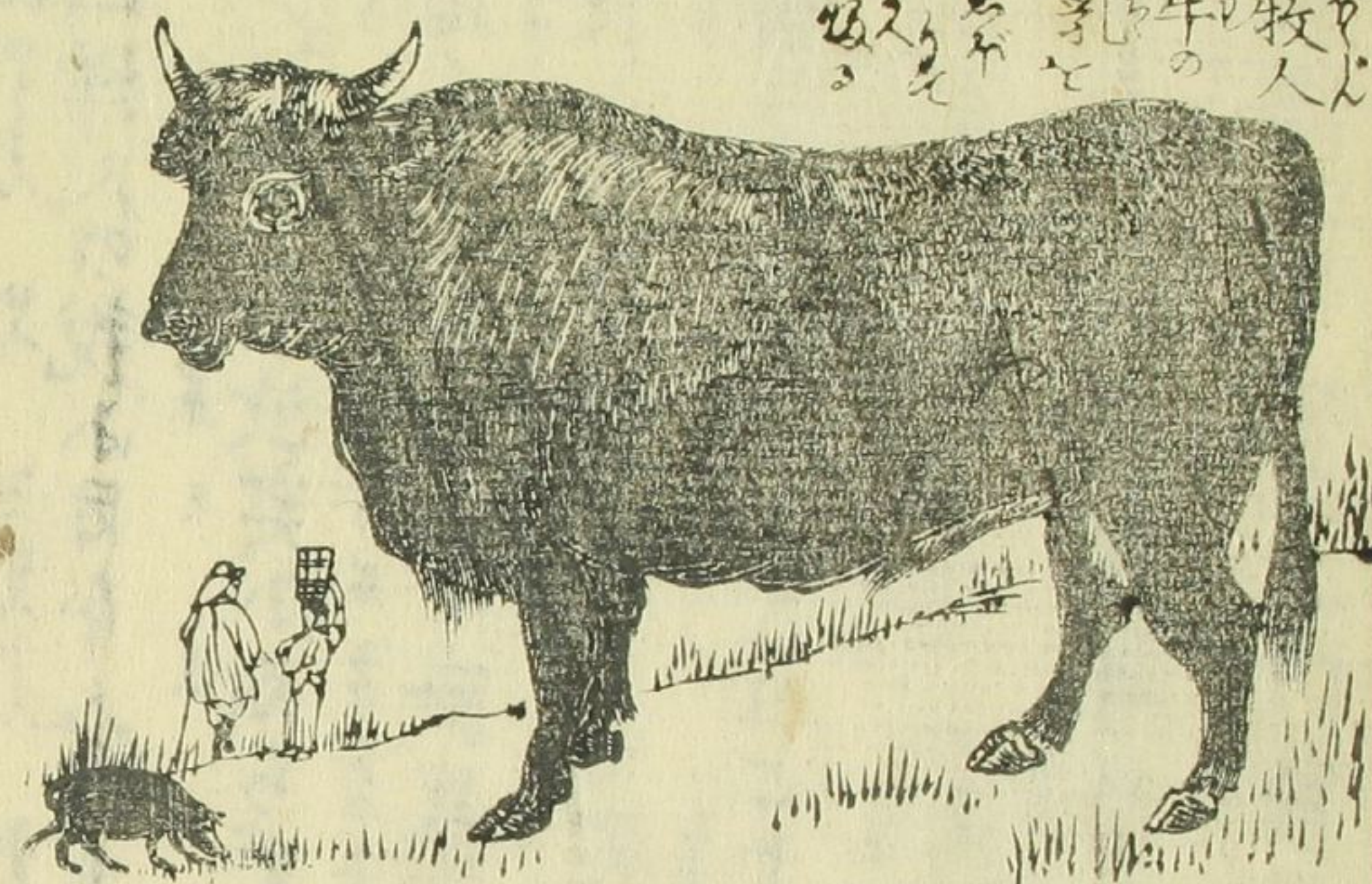
西洋人の蒸餅とて麦の粉と製衣しつらりのを食と
みらるるの蒸れども蒸餅に却つて我朝人の飯小添
て菜と食ふ如くみりて獸肉の方と重小用ゆる
るの獸肉に綿羊と上等と牛と中等と一系と

下等とするる牛に除り屠りてその新鮮肉を
強くして煮へ悪半日不ども経るると炙と為す
又小豚の毒あるよしと以て料理する不加減のり
は中等の人より牛肉取肉ると塩煮まき照り
焼ふなり牛の乳不て製衣しつらるミルクといふ物と
附て食すまきども下等の人不至りては塩漬の獸
肉なり彼の私の料理人の説法不弛走の第一と
るらりの七面鳥の肉まると云り実不然るや

否や西洋の料理ハ塩氣低くして於て湯煮の如
 食事とする時の薑の上への砂糖橙酢焼塩ミルク胡椒
 とこの物と血氣不入れて別不双べ並き食する人の隨
 意不骨と合せて用ゆ客と遊へて馳走とする時の食
 羞の上への必ずらず菜一き瓶と飛程くの草花と師
 うと常とするあり同一歐羅巴の内でも西班牙葡
 萄牙あどい南寄りの地ありて多く海を和えこれ魚
 肉と専ら小用ゆると也

西洋人の祝日日本人より多く田畑不化る穀物並菜と
 うと食する故実不食らざりて糟ふのを食す故大小用
 近くして智カ少く歐羅巴人へ牛豕羊などの肉を以て
 食と乃れ糟少くして実不食ると多し肉て智カ共ふ
 勝れり多と言ひ然れども其種ありや否や未だ究めず
 と能くとも多し其自己が必を以て其とあるの戲言なり
 あり唐人の森云少ありん
 西洋人まこと言ふ穀物と常の食とするは早魃霖

牧人の牛の乳を飲む



雨後水暴風と云の憂ひ
 多くを養ひと天不任
 する故に候悪き年亦續
 けを次第不食物終り由死
 致小肌腫して人死する由
 あり肉食と常とある必ハ
 牛羊豕と云と飼ふ人の
 五を以てある故年々不何

程屠り何程養うると云ふの極り出来ると以て肌腫る
 との憂ひありと然れども牛羊豕といふは生物の身といふ
 流り病ありとも云々一既小先年豕の死病あり
 として病多く死しつゝ是ら飼方の不熟より起りしと
 言れど人最己の身と厭いざる身なりといふとも暴淫病の
 如き病深病ひふかりて死ねと云ふは強ち不吉い方の
 悪き故とも云ふがさからんう獣肉を食する所といふ
 も制度悪くして人怠慢小至り飼方粗疎あらば

食糧自づと乞ふかるべく五穀を食すと雖も好く
穀と守りたる三年に奉不作續くも人の死する所至
らんや歐羅巴の氣候すてきけれを草木ともみ生育
悪し故に獸肉を以て食と爲るまのまあり然れど同
歐羅巴の内でも土耳其の氣候温暖なるが故に
草木とも能繁茂するを以て米と爲るの食とありす
るるり米の食の最上なるの清潔米ふ越す所のあり
るるり矢張我必畏負元化至らぬ頑固なるらん

○亞細亞へ諸カ加ふ勝れりと云ふ説
歐羅巴人五六カ加の中ふて亞細亞カ加を以て最上の地と
する
ある人種の始まりアダムといふ男神イフと云ふ女神
の出来し地を印笈の灵就鳥山と云ふ又地中海の東
と神々の居ると稱しアダムイフの跡ありともいふ何れも
亞細亞カ加の内ふ在れあり且孔子釈迦耶穌の如き
聖人いで磁石時手鉄炮を造り始り世に要用の器
械の發明は多く支那人ふあり方今西洋人の物を製

造すつくりるものふまじ奇まじ巧まじとまじ極まじるものもまじ基もとくところのまじ支し那な人じんのまじ発はつ明めい
 あせよふまじ周まじりてかまじり然れど西せい洋やう人じんをまじ究きう理り学がくとまじ言い
 むまじ故こ不ふ却くてまじ其その精せい巧まじのまじ了りょうかる支し那な人じん不まじ勝まじぬることまじ
 遠とほ一さき前まへふまじ言いるまじがまじ如ごとくまじ亞あ細さい亞あへまじ古こくまじ人じん扱ありまじ多おほくまじ
 加くわ之の不ふ土ど地ち膏こう腴うるまじとまじ他た邦ほうのまじ及およぶまじ
 きまじふまじ非ひざるまじとまじ以もつてまじかまじりまじとまじ

見聞図解二編下位

東 京 書 肆

須	山	小	岡	和	須	和	藤	森	山	鶴	九	丁	丁	丁
原	城	田	泉	泉	原	泉	岡	屋	屋	屋	屋	屋	屋	屋
茂	佐	新	嘉	市	伊	金	勘	慶	治	藤	喜	庄	平	善
兵	兵	兵	兵	兵	兵	衛	衛	次	兵	兵	右	五	五	五
衛	衛	衛	七	八	門	門	門	郎	衛	衛	郎	郎	郎	七

